本を選ぶ

高校図書館版

NO.72 2021年（令和3年）11月20日
https://www.las2005.com

●発行／ライブラリー・アド・サービス
〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

ろん・ぽわん

若いうちに出会えれば

並木せつ子

『花埋み』のモデル荻野吟子は日本で最初の女医と言われている。２番目は医者の娘で生沢クノ（二人ともなぜか埼玉県出身）、３番目は高橋瑞（みず）という愛知県の元士族の娘。明治当初女性には閉ざされていた医術開業試験の受験や医学校入学が可能になったのは、こうした人たちの波状行動（?）があった結果なのである。荻野吟子は明治15年と16年に願書を提出したが却下され内務省に請願書を提出。生沢クノも16年に東京と埼玉の知事宛に請願書を提出。高橋瑞は16年に友人と内務省へ直接請願に。瑞の友人はその後も毎月１回内務省へ請願に行き続けた。受験が許可されたのは17年。彼女たちの度重なる必死の請願が実を結んだとも言えるだろう。

３人のうち高橋瑞という人がおもしろい。24歳のとき実家を風呂敷包み一つで飛び出し、旅芸人一座の賄いをしながら上京。この時点で医者を目指していたわけではない。ひたすら学問がしたいという一念だった。東京そして群馬と生活拠点は変わっても学ぶ機会には巡り合えぬまま時は過ぎる。だが、偶然母子ともに亡くなるという出産に立ち会ったとき瑞の将来は決まった。産婆になろうと決意し、評判の高い産婆の内弟子になる。師匠は数少ない「産婆試験に合格している」産婆の一人だった。
数年後、師匠に勧められ東京の産婆学校に入学。学びたいという望みは28歳にしてやっとかなえられたのである。産婆試験にも合格するが、学んだことで産婆の仕事の限界も知った。産婆に許された処置だけでは危険な出産の際に母子の命を救えない。ならば医者になろう―「母も子も死なせない」という最初の決意の前に迷いは無かった。そこで前述の内務省への直談判になったというわけである。

受験が可能になると瑞は女性を受け入れる医学校を探した。産婆学校でしか学んでいなかったからだ。他の二人のように伝手もお金もない瑞は、学費の安い済生学舎の門をたたいた。当然のように断られるが毎日門前に立ち続け、ついにその門をこじ開けたのである。済生学舎はこれ以降、女性を受け入れるようになったのだから画期的なことだった。34歳で試験に合格、瑞は医院を開業するが、さらに医学を学びたいとドイツに留学する。目指すベルリン大学が女性の入学を認めていないのも知らずに……。

腕利きの産婆として既に自立しているのに、医者を目指す。医者として開業したのにまだ学ぶことがあるとドイツへ留学する。内務省まで一緒に請願に行った友人は、瑞を「迷いや不安を吹き飛ばしでくれる人」と言っていたが、瑞の合格を知ると自らも学びなおし看護婦になった。まさにそういう気持ちにさせる人である。偉人の話というなら荻野吟子や生沢クノだが、読んだ者を元気にシャンとした気持ちにさせてくれる人なら高橋瑞だろうか。できれば高校生くらいのときに出会いたかったものである。こういう人に本の中でも、映画でも漫画でもよい、若いうちに出会えれば幸せ者である。現実世界で出会えればもっとよい。（なみき せつこ）

社会への扉を開く
～小さな高校図書館の取り組みから～

大場　真紀

宮城県松山高等学校は、仙台市から北東へ約４０㎞、大崎市東部にあります。普通科と家政科が各学年に１学級ずつ計６学級からなる、全校生徒１５０人の小規模校です。入学してくる生徒は「保育士になりたい」「調理に関心がある」等の目的をもっている者が多い一方で、中学校までにさまざまな悩みを抱えてきた生徒や、長期欠席を経て心機一転新しいスタートを切ろうという生徒も一定数います。卒業後は、半数以上の生徒が就職で社会へと巣立っていきます。体験活動の機会が少なかった生徒たちが社会に出る前の最後の学校生活で、学び直しや育ち直しを含む多くの体験を得られるように、教職員は日々生徒たちに寄り添い心を育んでいます。

小さな学校の小さな図書館で

私が本校に赴任したのは４年前のこと。着任当初は授業での図書館利用は多いものの、昼休みや放課後に図書館へ立ち寄る生徒が少ないことに戸惑いを感じていました。放課後の図書委員会活動やイベントも、委員の何人かは部活動やアルバイト等によるドタキャンでサーッと帰ってしまいます。その後の先生方との情報交換から、中にはさまざまな事情を抱えている生徒がいることがわかってきました。また、「人と関わることが苦手」「周りから褒められたり、認められたりした経験が少ない」等、自己肯定感の低さを感じる生徒も少なくありません。

図書館の運営面では、本校の教育計画の中に「全校朝読書の徹底と図書館の積極的活用の工夫」「自主的・自発的に行動できる生徒の育成と、確かなコミュニケーションづくり」「主体的活動の場の設定と充実感や達成感を味わえる、活気ある学校づくり」を挙げており、学校図書館運営の柱となっています。司書教諭の配置はないものの、図書館活動には多くの先生方がそれぞれの立場で関わって下さり協力的です。「学校の中の図書館」という一体感をもちながら業務にあたることができ、一人配置の学校司書にとって恵まれた環境です。

本稿では、小さな学校図書館が「チーム学校」の一員として４年間試行錯誤してきた中から３つの活動についてご紹介します。

学校を飛び出して　公共図書館との連携展示

２年前より、大崎市図書館と大崎地域の県立高校12 校による連携展示を行っています。１～２校ずつ１か月毎の輪番制で、「図書委員おすすめの本」を中心に各校の特色溢れる展示となっています。

本校では、全校生徒へのアンケートで寄せられた「心に残る本」や、全校一斉のビブリオバトルで登場したバトル本等を中心に紹介しています。生徒が図書館へ赴き、手作りの POP や栞を添えたり、図書委員会や学習活動の様子等の掲示をしたり、家政科の卒業制作・ウェディングドレスの展示を行います。生徒自身がブラックボードにイラストを描き、装飾を行った展示棚には愛着があるのでしょう。後日、さりげなく利用の様子をチェックしに行く生徒もおり、「この前図書館へ行ったら、ずいぶん本が借りられていたよ。」と、嬉しそうに報告してくれることがあります。

生徒たちはそれまで利用経験が少なかった公共図書館を身近に感じ、自分たちが勧めた本を手にしてもらう喜びを積み重ねます。

「ほっこりカフェ」でおいしく・楽しく・コミュカUP！

本校図書館での「ほっこりカフェ」の取り組みは、今年で３年目となります。月に１回放課後にオープンし、毎回２５人前後の生徒が訪れます。季節を感じるおやつを食べながらゲームやおしゃべり、あるいは静かに本を読む等、思い思いに“ほっこり”としたゆるやかな時間を過ごしています。

きっかけは、先生方との炉辺談話からでした。スクールソーシャルワーカー（SSW）からソーシャルスキルトレーニング実施の提案があったことや、生徒の生活環境の課題や食事を十分に摂取できてい

ない生徒がいること等が話題に上がったのです。すぐに神奈川県立田奈高校の「ぴっかりカフェ」の実践が頭に浮かび、私は学校図書館長である校長先生のもとに、松田ユリ子氏の著書『図書館はカラフルな学びの場』（ペリカン社／ 2018）を持ち込み、図書館カフェを提案しました。テンポよく話が進み、翌月には「ほっこりカフェ」がオープンしたのです。このチームワークと機動力は本校の強みだと思っています。現在、運営は学校の組織に位置づけられ、教諭、養護教諭、学校生活適応支援員、学校司書によるチームが中心となり運営から閉会後の振り返りまでを担います。

前述のとおり、これまでの日常の中で人にお茶を淹れて出す、みんなで分け合って食べるといったことを身に付ける機会が少なかった生徒もいます。SSW の勧めで、例えば温かい飲み物には陶器のカップとソーサーを使います。欠けたり割れたりしてしまうことを知り割れやすいものを慎重に扱うようになること、食器の口当たりを感じること等ひとつひとつが暮らしに密着した経験に繋がっていきます。

カフェのメニューが近くの農業高校で生産したリンゴの日には、まるごと 1 個を生徒自身で皮をむいて食べます。包丁の扱いがぎこちない生徒には、自然に調理コースの生徒が寄り添って教えてくれます。

嬉しい変化もありました。一番の人気メニューはおにぎりです。温かいご飯と好みの具で自分のおにぎりを握ります。すると後日、ある生徒が昼食に自分でおにぎりを握って持ってきたというのです。以前から食生活が気になっていた生徒です。

「お腹を満たせば解決なのではなく，自分でお腹を満たす術（すべ）を身につけさせるのが学校の役目。」家庭科教員でもある立ち上げ時の校長先生の言葉が示すように、「ほっこり」での体験が、いつか自分で課題を解決し生き抜いていく力になるよう願わずにはいられません。

シトラスリボンプロジェクト in 松山高校

「シトラスリボンプロジェクト」は、コロナ禍で生まれた差別、偏見を耳にした愛媛県の有志がつくったプロジェクトで、シトラス色（愛媛特産の柑橘をイメージ）の水引の手法で作ったリボンや専用ロゴを身につけて「ただいま」「おかえり」の気持ちを表す活動です。

本校では、今年の２月から生徒図書委員と保健委員、ボランティアの生徒が連携して取り組んできました。２月は校内だけでの取り組みでしたが、この夏の感染拡大をきっかけに、活動の場を地域へと広げていきました。委員の生徒は、養護教諭からコロナ禍での差別や偏見の問題、医療従事者やエッセンシャルワーカーの献身的な仕事について学び、校内放送で全校生徒へ活動の趣旨を呼びかけました。リボンの製作では、二つの委員会の生徒たちが、学年を越えて作り方を教え合いながら進めました。やがて、図書館で帰りのバス時間を待つ生徒や、保健室へ相談に来た生徒が作ってみるというように、委員以外の生徒たちにも広がっていきました。できあがったシトラスリボンは１０００個を超えました。ストラップにして、大崎市図書館、吉野作造記念館、松山地域の市役所総合支所、公民館、社会福祉協議会、郵便局の窓口等に置かせていただきました。

ある生徒は、バスに乗り合わせた小学生のランドセルに、自分たちのシトラスリボンが付いているのを見かけたと教えてくれました。どんなに嬉しかったことでしょう。ひとりひとりができることは小さいけれど、自分たちでやってみようと動き出せば、みんなの力で大きなうねりとなっていく。そんな体験ができるのも、学校だからこそだと思います。

学校図書館に「社会への扉」を

学校図書館には常に学校司書がいて、いつでも誰でも自由に立ち寄れる多様性と柔軟性のある場所です。様々な活動をとおして地域や社会へと繋り、小さな成功体験の積み重ねを自信に変えられる生徒がいるならば、それは「チーム学校」の図書館として大切な役割ではないかと思うのです。

「みんなが進む未来には、もっともっと広い世界が待っていることに気づいて！」と願いながら、今日も図書館にさりげなく、でもたくさんの「しかけ」を散りばめています。

（おおば まき：宮城県松山高等学校）

「読まない」生徒は「読めない」生徒
―― 読書へのハードルを下げる試み

長沼 祥子

学校図書館に対する想い

いまの仕事をする前、私は公共図書館で児童書担当の仕事をしていたことがあります。ある日のこと、おはなし会運営の際、ふと思ったことがありました。――ここに来ている子どもたちは、とても幸せな子たち。でも、私たちが「物語の力」を届けたいのは、この場に来ることが出来ない子たちだ。――公共図書館で勤めていると、来館してくれた人に対してしかアプローチができません。図書館における子どもたちの最前線、学校図書館で働いてみたい。そんな想いもあって、埼玉県の採用試験を受けました。

本が「嫌い」な生徒はいない

学校司書として初めて配属されたのは、埼玉県熊谷市にある全日制の普通科高校です。生徒数が300 人に満たない小規模校で、「学び直しから大学進学まで」というスローガンのもと、多様な生徒を受け入れ育てる学校となっています。図書館は特別棟の５階にあり、立地がよいとはいえません。前任者との引継ぎの際、司書教諭の先生から「うちの学校の生徒は、読書習慣が身についておらず、読んでもライトノベルやケータイ小説ばかりです」と聞いており、授業利用もあまりない様子だったので、図書館に来る生徒がいるのか、かなり不安でしたが、始まってみると思ったより生徒が来てくれてほっとしました。

本校の学び直しを目的とした学校設定科目には、朝読書が含まれています。そのおかげで、朝読書用の本を借りる生徒が図書館に来ますが、生徒と接して感じたことは、うちの生徒は、読書が「嫌い」なのではなく「苦手」であるということです。生徒の話を聞くと、「本が嫌い」という生徒はほぼおらず、「自分は本を読めないから」と、なんだか自信なさげに答えるのです。おすすめ本を聞かれ、掘り下げて聞くと、「自分は絵がないと理解できない」「ふりがなが振っていないと無理」「難しい本は読めない」という言葉が聞こえてきます。彼らにとって、読書をすることはハードルが高いことなのだなぁ、と考えさせられました。

生徒と本をつなぐこと

私は学校図書館には、本が苦手な生徒のために「本との出会いをプロデュースすること」、「読書に対するハードルを下げること」の２つの側面があると思っています。特に、本校にとって、後者の「生徒が本を読めない要因・ハードルを取り除くこと」は不可欠です。なぜなら、本校生徒は「自分は本が読めない」と思い込んでいる節があり、読書に対する自信がないからです。先生方の話を聞くと、読書に限らず、今まで成功体験を経験できなかった生徒が少なからずいるようです。読書を通して、自分でも本が読める、楽しめるという成功体験をしてほしい。そう考えて図書館内でできる小さな取り組みから、図書館の枠を越えた取り組みまで、自分にできることからやってみることにしました。

ノベライズ本は「読書の入り口」

読書が苦手な生徒もマンガやアニメ、映画などビジュアル的なメディアは好きで、よく話題に出ます。朝読書では、マンガが禁止されているため、ノベライズ本を求める生徒が少なくありません。そこで、まず「映像化されている本コーナー」を充実させました。着任当初、ノベライズ本はライトノベルなどと混合されていたので、ノベライズ本・原作本を集め独立したコーナーを作成しました。さらに、映画館で入手したチラシを飾り、生徒の興味を掻きたてました。

ノベライズ本は、「読書の入り口」として有効です。ある程度イメージが固まっているうえで、活字を読むということが、読書へのハードルを下げます。そこから、原作本へ手を伸ばしてくれたら、しめたものです。ノベライズ本は一般向けと児童向けがありますが、漢字が読みにくい学習・発障

害の生徒のためと、日本語が母国語ではない生徒への多文化サービスの観点から、ルビが振ってあるジュニア版を購入するようにしています。

学校図書館の多文化サービス

本校には、日本語を母国語としない生徒も在籍しています。学校図書館でも、多文化サービスのニーズがあると感じたきっかけは、「朝読書用に、平仮名またはカタカナだけで書かれている小説が読みたい。」というレファレンスでした。その生徒は、中国語を母国語とする生徒で、平仮名・カタカナのみならなんとか読めるとのことでした。いろいろ探して、日本語学習者用の多読本を提供しましたが、その際気づいたことは、本校に英語以外の洋書がないということでした。

日本語を母国語としない生徒にとってのハードルは、言語です。朝読書の時くらい、母国語を読ませてあげたい。そこで、少しずつ洋書を購入するようになり、現在は、英語・中国語・ベトナム語、そしてベンガル語の書籍を所蔵しています。足りない分は、県立図書館から相互貸借で借りています。話の流れで紹介した村上春樹の本も、タイ語なら読めるというので、取り寄せた事例もありました。また、他校の司書と共同で、外国語版の図書館利用案内を生徒に協力してもらって作成し、

オリエンテーション等の際に紹介しています。

このように多文化サービスは、自校だけで完結させるのではなく、他校や県立図書館と連携することで、より充実したサービスが提供できるようになりました。

また、コロナ下の休校期間を活用して、書架サインを一新しました。見出しにルビを振り、ピクトグラムなどを用いて書架サインをビジュアル化し、関心のある資料がすぐ探せる環境づくりを目指しています。この取り組みは、日本語を母国語としない生徒を含む「特別な教育的ニーズのある生徒」のためのアクセシビリティの保障をするものでもあります。次回は、こちらの観点からもお話ししたいと思います。

（ながぬま しょうこ：埼玉県立妻沼高等学校司書）